

## 4 高等学校・古典の実践

### 「漢文：史記『項羽と劉邦』」

#### 実践の概要

漢文についての学習は、中学校時の学習量にも差がみられる中で、1年次に書き下しの基礎と故事成語に触れた程度である。今年度から教科担当となったが、当初から、授業では2人1組等で考えさせたり相談させたりする活動を展開し、生徒もそのスタイルに馴染みつつある。漢文の学習にもそれを活かしながら、視覚、聴覚や個人差への配慮を取り入れることで、少し長い漢文に触れながら漢文を読む力の向上をはかっておきたいと考えた。

3年間クラス替えない外国語学科2年生の出席番号前半クラスで、生徒同士は気心が通じており、学習環境としてルールとリレーションは定着している。文系大学を希望する生徒が多いと思われるが、古典が受験科目に必要なかどうかの見極めはまだできていない。古典文法の定着には個人差があるものの、授業の取り組みは意欲的である。

#### 1 単元（題材）について

##### (1) 単元観

「史記」、特に「項羽本紀」は「史記」の中でも最もよく知られ親しまれてきたものである。項羽と劉邦を中心に多彩な人物が登場し、劇的な描写や巧みな人間像の表現、見事な構成など、簡潔で力強くかつ美しい表現を味わうことができる。生徒が物語として話の展開を楽しみながら、漢文の学びについて積み重ねていくことができる教材である。

##### (2) 本単元の意図

1学期から2学期前半までは、古典文法を中心に1年次の復習の上に基礎的な事項の確認を行った。古文の読解にようやく慣れ始めたところである。2学期末は学校行事と定期考査までの授業数との兼ね合いから漢文に取り組むことになり、漢文学習初学者の教材として「史記」（鴻門之会）を選んだ。書き下し文、現代語訳、基本句法、読解を行うのに適している。一方で、生徒にとって長文の漢文に触れるのは初めてであるため、やや抵抗感を持つ生徒がいると考えられた。そこで、きちんと訓読できることが大切だと考え、教科書ではなくA3用紙を縦方向で3分割し白文、口語訳、ポイントの整理を1枚に収めたプリント、書き下し文（ひらがな）プリントを使用して、生徒の漢文への苦手意識を和らげながら着実に理解を深める（わかる）ことを意図した。

##### (3) 本単元の目標

- ・長文の漢文を正確に音読することができるようになる。
- ・漢文の句法に注意しながら正確に現代語訳できる。
- ・文脈をたどり、登場人物の関係や主人公項羽の心情や性格を理解する。
- ・『史記』の文章の優れた表現を味わう。

## 2 本時の学習指導の実際

### (1) 本時の目標

- ・書き下し文のルールに従って、白文に訓点を施すことができるようになる。

### (2) 展開

過程	ねらい	学習活動	留意事項（◆UDの視点）	評価
導入 5分	漢文学習のモチベーションアップ	プリント類の確認	◆本時のめあてと授業の流れについて説明（視点②⑧⑨）	観察
展開 42分	音読で漢文のリズムになれる。	音読活動 （個人→2人1組） ①のみ	音読後に、「ヲ、ニ」の2つの助詞に留意。	観察
	訓点の基礎を確認する。	白文に訓点をつける。 （個人→2人1組）	◆（視点⑤⑥⑦⑨⑩） ・鉛筆での記入。正解を赤ペンで記入。  ・返り点の基礎、書き下しのルールを確認。 ・正解率が低い場合は解説の時間を割り、なぜ間違えたのか気づかせ、弱点を強化。	プリント 観察
	訓点の基礎を確認	②～白文に訓点をつける。 （個人→2人1組）	同上	プリント 観察
	書き下し文を作る。	①～書き下し文を作る。 （個人→2人1組）	◆（視点⑧⑨⑩⑪⑫） ・書き下しの5ルールを参照。 （書かない字／助動詞・助詞） ・正解率が低い場合は解説の時間を割り、なぜ間違えたのか気づかせ、弱点を強化。	プリント 観察
	語句、要点を正確に理解しているか確認する。	語句や句法について説明を聞き、メモを取る。	◆語句や助動詞、句法の説明を板書。 （視点⑦） ・必要な箇所は口語訳を参照。	プリント
まとめ 3分	本文の理解をより定着を促す。	書き下しのルールや、内容把握に関する質問を口頭で行い、要点を押さえているかを確認。	生徒の状況に応じて、全員一斉に答えたり、正解と思われるものに挙手。	観察

### 3 ユニバーサルデザインの視点

#### (1) 穏やかな声で授業を行う (視点②⑧⑨)

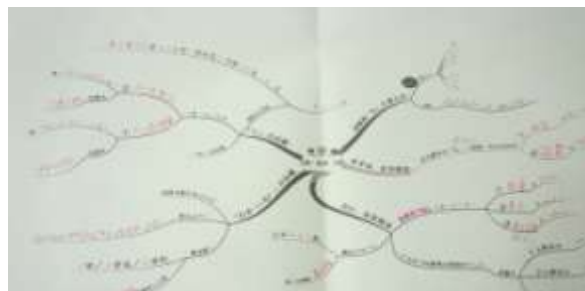
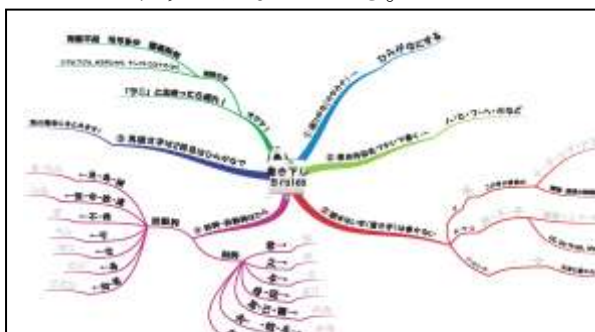
授業では抑揚は大切にしますが、不必要な大声や怒声は出さない。指示する時は「近くに寄って」「穏やかな声で」「静かに言う」ことに気をつけている。生徒を指名する際も基本的には「くん、さん」を付ける。これは、生徒を尊重するとともに、活動への参加を促す意味でも有効だと思う。これらのことの意図については、年度当初の授業開始時にいくつかのエピソードと主に生徒に説明している。



#### (2) 生徒が「わかる」ことに焦点をあてる (視点⑤⑥⑦⑨⑩)

生徒がその時間の授業内容をその時間に「わかる」ことをゴールの1つと考えている。そのためのわかりやすく伝える技術について、「分かりやすい…技術」シリーズ（講談社ブルーバックス、藤沢晃治著）の中から「ゴールを先に示す」「生徒をみる」「情報を分ける」「欲張らない」「イメージの多用」「一区切りを小さく」などを参考にしている。

また、授業内容の整理や記憶のツールとしてマインドマップを活用している。これは、複数の参考書に掲載されている内容を、1枚の用紙に整理できる点と色で強調することで暗記が容易くなるという点で効果が高い。多くの生徒にとって、「わかる」と「使う」ことを繋ぐよいブリッジになっている。



左は、今回の授業の前に書き下し文のルールを5つにまとめたマインドマップ。右は、暗記すべきポイントを空欄（または薄く印刷）にして生徒に配布したもので、生徒には赤ペンで記入（またはなぞり書き）させる。赤ペンと赤シートで暗記する生徒の文化を活用した。

#### (3) 視覚、聴覚の活用とペアでの学習 (視点⑧⑨⑩⑪⑫)

教科書に記載されている訓読文を書き下し文にしていく展開に取り組むと、考えるのではなく板書を写す活動に偏りがちになることがある。

生徒が漢文と向き合う時間を確保するために、漢文学習の個人差に配慮しつつ、一人ひとりの生徒が考える時間を多く設けることを意図した。耳から入る書き下し文の音読と目から入る白文の照合、ひらがなで書かれた書き下し文から語句の読みや訓点（返り点、送り仮名）の類推、2人1組での類推、照合などを、プリントを使って行った。

このペア学習はわからないことや疑問に思ったことを確認できるだけでなく、教え合うことで自分の理解を高める効果もある。さらには教師への質問につながり、わからないままにしま



い効果もある。

#### 4 成功へのポイント

##### ※実施する上でのポイント

授業開始にあたって、口頭でその授業時間の使い方を最初に提示するようにしている。授業の終わりに、ここまでやった、できたと振り返ることもある。また、指示にあたっては、「見て（板書でヒントや解法のプロセスを共有する際）」、「考えて（自分で問題に取り組ませる際）」、「書いてみて（2人1組で相談させる前／とりあえず書かせることはとても大切）」のようにシンプルな方法がよい。簡単な指示でも、1人の教師の指示に生徒全員が従うムードは授業のルール確立に欠かせない要素だと考える。

「わかる」ことに焦点をあて、「できる」に繋げていくことを念頭に授業を組み立てているが、その前提に「楽しさ」を位置づけている。マインドマップは見て楽しいものだし、場面のイメージ化やイラストなど視覚的な工夫を生徒たちは好む。学びのエンジンを回すための工夫を脱線しすぎに留意しつつ自分自身も楽しんでいる。この点は教師と生徒、生徒同士のリレーション形成に大いに役立っていると思う。

以上のように、ルールとリレーションを成立させることは、恥ずかしさや不安を取り除く効果がある。ひいては授業内外での教師への質問や生徒同士の気兼ねないペア学習を容易なものにしていると考える。

プリント教材は、こうした授業構成を成立させるためのツールだと考える。

##### ※応用・発展例

研究授業のアンケートで、「生徒の言葉を拾い、全体に繋げる配慮があった。落ちこぼれがないと感じた」「生徒が喋りたくなるタイミングが無い。一人でじっくり考える時間が確保されていて良い」「漢文の授業でここまで生徒に考えさせるという視点がよい」「2人組から4人組へと発展させてもよいのでは」という感想があった。

研修会のように投影機を用いて、アニメーションを適度に取り入れたプレゼンテーション形式で授業を行える環境があれば、生徒とのかかわり、生徒の活動、時間の使い方や解法のプロセスの共有などに更なる創意工夫が可能になると思う。協調学習や授業のユニバーサルデザイン化などの実践に今後も学び続けたい。

##### ※生徒の様子

漢文単元の1時間目の授業であり、生徒にも戸惑いがあったようだ。同学年の他クラスでも1時間目は同じ進度でしか授業を展開できなかった。しかし、どのクラスも、次第にひらがなの書き下し文を見て（聞いて）白文に訓点を施していく作業はスムーズにできるようになり、刺激や量の点でも漢文の授業のリズム感やペースは共有されていった。

同時に、それでも漢文が苦手な生徒の存在が浮き上がり始めたので、やや難解な箇所は板書説明で再確認したり授業中に個別に声かけしたりすることなどで個別の配慮を行った。

書き下し文の読解は、文章自体が難解ではないし古文での授業で慣れ親しんできた形式であったこともあって、ストーリーの面白さを味わうことができたようだ。